慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	E・P・トムスン,N・デイヴィズ, C・ギンズブルグ他(近藤和彦, 野村達郎編訳), 『歴史家たち』
Sub Title	
Author	清水, 祐司(Shimizu, Yuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.4 (1990. 12) ,p.153(505)- 154(506)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19901200-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

E・P・トムスン、N・デイヴィズ、
C・ギンズブルグ他
（近藤和彦、野村達郎編訳）

『歴史家たち』

（名古屋大学出版会、一九九〇年）

清水　祐司

『歴史家たち』は、十四人の歴史家にたいするインタヴューをまとめたものである。その十四人とは、エリック・ホブズボーム（イギリス社会経済史、イギリス労働史）、モーシュ・レヴィン（ロシア・ソヴィエト社会史）、E・P・トムスン（イギリス労働運動史、イギリス社会史）、ナタリ・Z・ディヴィス（フランス社会史）、カルロ・ギンズブルグ（イタリア社会史）、リンダ・ゴードン（ロシア史、アメリカ女性史）、シーラ・ローボタム（イギリス女性史）、W・A・ウイリアムズ（アメリカ外交史、アメリカ政治史）、デイヴィト・モントゴメリ（アメリカ労働民衆史）、ハーバート・ガットマン（アメリカ労働民衆史）、ストートン・リンド（アメリカ労働民衆史）、ヴィンセント・ハーディング（黒人解放運動史）、C・L・R・ジェイムズ（ジャーナリスト）、ジョン・ウォマック（メキシコ革命史）をさしている。

彼らのうち九人は、その著書が翻訳されており、わが国でもすでに一般に知られている歴史家たちである。これらの歴史家はいずれも「ラディカル」（ものごとの根本にたちかえる、急進的というふたつの意味で）であり、したがってアカデミズムの歴史学という狭い枠を多少ともはみだしている、はみださざるをえないという共通性をもっている（C・L・Rジェイムズは狭義の歴史家とはいえないかもしれないが、カリブの解放運動に身をささげた人物であり、またその著書『黒いジャコバン』はサント・ドミンゴの革命を扱った傑作であるという理由で、「ラディカル」な歴史家のなかに入れられていることに異論はないであろう）。

十四のインタヴューで成り立っている本書の特徴は、アカデミックな著作では直接に表明されにくかった問題について彼らの「肉声」を聞かせてくれるところにある。彼らのなかに自分の研究テーマと密接なかかわりのあるなじみの歴史家を見つけた読者ならば、これまで

に読んだ彼（彼女）の著作についてより深い理解を与えてくれるヒントを見いだすであろう。もっと一般的に読むことも、もちろん可能である。すなわち「歴史とは何か」という問題についての一級の教材として。あるいは、「ラディカル」であるために彼らは冷戦期にさまざまな困難に直面しているので、冷戦期における知識人にたいする政治的抑圧の生きた記録として読むこともできる。さらには、編者が「訳者あとがき」で述べているように、これは「二十世紀のそれぞれの分野で最先端に生きて、いま中年から老年の境地にある男女が、若い学生・知識人にむけて語った精神と行動の遍歴」であり、「世の中と人の生き方に関心をもつ人なら、だれでも心を動かされ励まされるだろう読物」なのであり、一種の「教養小説」として読むこともできよう。

現代イギリスの著名な哲学者と歴史家にたいするインタヴューを骨子としてまとめたヴェド・メータの『ハエとハエとり壺』と本書の違いは、前者では複数のインタヴューがひとつのまとまりとして扱われ、基本的には学問上の論争が浮き彫りにされていたのにたいして、後者では歴史家の言説が広い文脈のなかで位置づけられるように、歴史家の生活史や時代背景にも言及されている点であろう。もっとも、インタヴューをする側の力量、あるいは知的緊張の盛り上がりという点では、前者に軍配を上げる読者も少なくないと思われるが。

各人のインタヴューの前にはかなり入念な紹介があり、未知の歴史家についてのインタヴューもそれなりに理解できるように配慮されており、訳文もすぐれている。